

福山大学 図書館報

Library Announcement,
Fukuyama University

第2号
2004.9

<目次>

私が選んだ日本の古典ベスト8	片岡俊郎	1
特集：こころの一冊		
図書館で出会った本	島上 健	2
Beginning and Ending with Tropic of Cancer	Jeffrey J. Nazzaro	3
Drug Disposition in Humans	田中哲郎	5
『金瓶梅』に描写される女性たちの住まい	藤原美樹	6
私の人生の教科書	神笠孝介	8
小林よしのり著『戦争論』からみる日本人	大戸 研	9
図書館利用者アンケート		11
図書館からのお知らせ		11

私が選んだ日本の古典ベスト8

福山大学附属図書館長
経済学部 経済学科教授 片岡俊郎

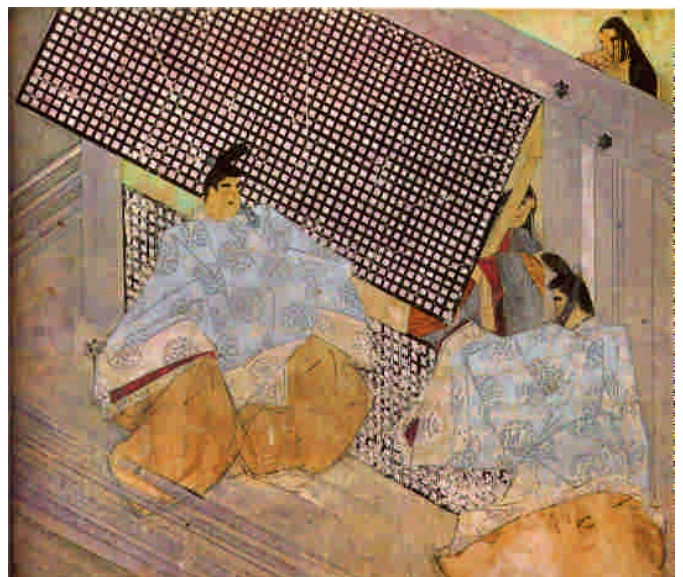
私の手元に小学館版『新編、日本古典文学全集』全88巻の案内パンフレットがある。「記紀、萬葉から西鶴、近松まで、頭注・原文・現代語訳の三段組み新編集」とあり、日本の古典が現代文で読めるようになった。

私は、歴史、文学の専門家ではないので、小学館版『日本歴史大事典』全4巻を参考にしながら、日本の古典、ベスト8を選んできた。

私は、専門の貨幣論の立場から、明治以後、大正、昭和と日本の歴史を整理しつつある。私が整理の軸に選んだのが、日本の貨幣理論家でもある日本銀行総裁をも務めた深井英五(1871-1945)である。私は、時代を日本とインド、日本とイギリス、日本と世界と順を追って考えていくうちに、1930年代、日本が目指すべきであった道は、軍事大国ではなく、経済大国への歩みではなかったかと、思いつつある。日本とインドが、同じ発展途上国でありながら、片や独立国、片や植民地、日本とイギリスでは、日本が発展途上国、イギリスが経済最先進国と、比較しながら、たどり着いた

結論である。世界の最先進国への道は、現在我々が享受しているように、経済大国であり、戦前においても可能ではなかったかと思う。日本は戦争を好む国ではなく、平和を愛する国であることを世界に示すためにも。私は、日本の古典を考えるに際し、我々に一番近い時代、江戸時代に目を向けることにより、日本の歴史も把握されるのではないかと考えた。日本の江戸時代は、260余年にわたって平和な時代であり、文化が栄えたからである。

江戸時代の古典といえば、井原西鶴(1642-1693)、松尾芭蕉(1644-1694)、近松



紫式部日記(東京・五島美術館蔵)

門左衛門(1653-1724)の著作をあげるのが一般的である。井原西鶴の世界が、庶民の男女の物語であるとすれば、貴族の男女の物語である平安中期の紫式部『源氏物語』をあげざるをえない。『源氏物語』は、日本の古典中の古典といわれるものである。



紫式部像(京都文化博物館)

短詩形である俳諧の完成者、松尾芭蕉を念頭に置けば、日本最古の歌集『万葉集』をあげることができる。『万葉集』は、長歌、施頭歌、仏足石歌、短歌、漢詩、文章を収めているからである。

近松門左衛門が、人形浄瑠璃の作者であることから、室町時代の能作者、世阿弥があがる。人間を描くのに、世阿弥は人間に能面を着け、近松は人形で、人間の本質に迫ったからである。平安以前の万葉集、平安時代の源氏物語、室町・戦国の世阿弥の能とくれば、他は、鎌倉時代の軍記物『平家物語』、江戸時代の思想を反映した滝沢馬琴『南総里見八犬伝』となる。

[図書館から]

日本歴史大事典 / 朝尾直弘[ほか]編
(小学館, 2000 - 2001)

本学図書館は所蔵していません。

また

井原西鶴の著作は、『好色一代男』ほか 7 件

松尾芭蕉の著作は、句集や文集など 3 件

近松門左衛門の著作は、浄瑠璃集など 5 件

紫式部の著作は、『源氏物語』など 11 件

『万葉集』または同関連図書は 34 件

『平家物語』または同関連図書は 13 件

について、それぞれ所蔵しておりますが

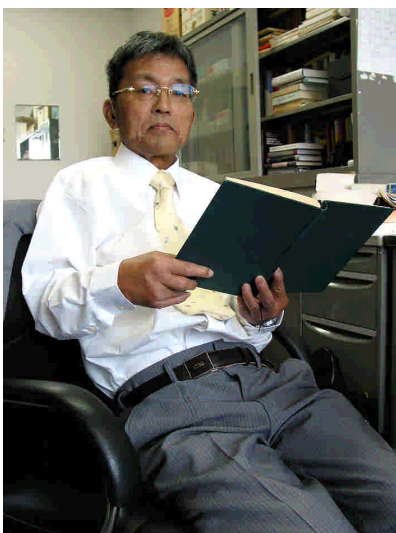
『南総里見八犬伝』

は、残念ながら所蔵していません。

特集：こころの一冊

図書館で出会った本

経済学部 国際経済学科教授 島上 健



これは以前、本学の学報「本」の欄で述べたことですが、学生時代に大学図書館で出会った本、小山満男『国際経済理論』を置いて他にはありません。小山先

生は本学の図書館長、経済学部長、初代国際経済学科長等を歴任されましたが、国際経済学科の完成を待たずに不帰の客とられた、本学および広島大学の名誉教授でした。

さて、この本との出会いについて述べましょう。当時(昭和 30-40 年代)の大学の商学部・経済学部では、ゼミあるいは研究会のインカレ活動が大変盛んで、例えば関西学生ゼミナール大会の金融論部門では、関学の小寺ゼミ、大阪市大の河合ゼミ、九大の岡橋ゼミの他京大・関西大・長崎大(ゼミ名はちょっと失念しました)等からの参加者によって「インフレ」の問題、「金融・金利の自由化」の問題等侃侃諤諤と異論・反論・オブジェクションが戦わされました。私は九州のとある地方大学で金融論研究会・近代経済学研究会に所属して、今思え

ば厚顔無恥(無知)以外の何者でもないので、一人前に論文らしきものを認め(たつもり、実際は転写した)、内外のゼミナール大会で発表したものでした。

経済学部^の学生ならば見当がつくと思いますが、本学図書館長片岡先生ならずとも、目の前に現れ出たのは J.M.Keynes でした。ケインズ『一般理論』は英語で書かれた原典(ケンブリッジの英語は小さな英和辞典では読みこなせません)はおろか日本語訳でも読めません(並外れた日本語能力を要します。ただ現在ケインズ全集として出版されている訳本には訳者解説があって読みやすくなっています)。ですから実際に読んだのは D.デイラード『J.M.ケインズの経済学』、K.クリハラ『ケインズ経済学入門』、伊東光晴『ケインズ』でした。これらは(私の読み方に難があったのかも知れませんが)外国との経済取引を遮断した閉鎖経済モデルあるいは経済学説史からの解説であったために、金融・貿易の自由化が論議され、為替相場制度が動揺する時代背景の下、開放経済モデルによる研究が関心の的であったその時代の要請とミスマッチを呈しており(勿論、学生の能力不足ということです)、ケインズ・モデルの開放化が喫緊^{きつぎん}の課題でした。ケインズの弟子である R.F.ハロッド等によってケインジアン開放マクロモデルが提示されてはいたのですが、私なりの模索過程あって大学図書館で出会ったのが、小山先生の『国際経済理論』だったのです。

この本がその後の私の進路を決定付けた本であり、研究の師・人生の師との出会いを決定付けた本となりました。この本は小山先生の博士論文ですから、並大抵の努力では読みこなすことはできません。そして現在でも論文を書く時の重要な参考文献であり新鮮な課題を提供しているのです。聞くところでは、日本を訪問中の R.F.ハロッドや H.G.ジョンソンが「日本語は読めないが、君の著書の数式を読めば内容は掴めるだろうからは是非一冊」と言ってこの本を所望したというほど、数式〔数学〕が多用され、各種定理が厳密に証明されています。我々門前の小僧はその証明部分を理解するのに四苦八苦するのです。

福山大学の学生諸君。幸いにして我が図書館は地方の私大付属であるにも拘らず^{かかわ}、その内容の充実度は中・四国地域では随一であることは周知の事実です。役割・機能の上でも随一のものにするのは利用する我々、特に学生諸君に課せられた責務であろうかと思えます。図書館の職員の方々から「あの学生さん又来ているよ!」と呆れられる位利用して、人生の指針となるべき「本」との出会いを果たして欲しいものです。

〔図書館から〕

国際経済理論 / 小山満男著(千倉書房.1964)
本学図書館に3冊所蔵しております。

分類番号	登録番号
333.01/K	13810210200
333.6/K	11740423300
333.6/K	11803415500

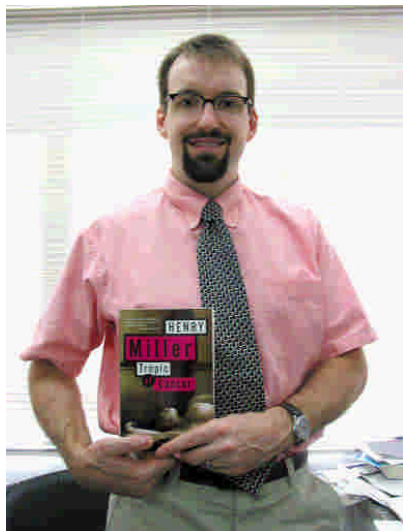
Special: A book in my mind
Beginning and Ending with
Tropic of Cancer
Fac.of Human Cultures and Sciences
Dept.of Human Cultures Jeffrey J. Nazzaro

There are many books of which I could say where I was when I first opened them. These

would be books I read for school, or very recently maybe; but there is just one for which I can go back to the moment of initial discovery, the time, the place, and the feeling I had, which exploded as an at once visceral and intellectual shudder of excitement, an awakening, and that book is Henry Miller's Tropic of Cancer.

It was fall and I was in college. I was visiting Harvard Square, as I did fairly often in those days, and I was inside the Coop, the bookstore of the renowned university, when I came across a paperback copy of Miller's masterpiece while perusing a tabletop display of well-known works. The book was infamous for its solabeled obsceneness and unabashed sexual content, having been banned in the United States for twenty-seven years after its initial publication in Paris in 1934. Certainly in many ways less sexual than long accepted novels by writers such as D.H. Lawrence and Henry James, Miller's censorship was most likely the product of his traightforwardness, his rejection of euphemism, and his embrace of Anglo-Saxon four-letter words for certain anatomical and physiological descriptions. For me, standing there in the crowded bookstore, something happened on the way to the dirty words, and if they were what originally drew me, then I remain grateful, for the effect was transforming.

In true cover blurb hyperbolic tradition, Miller's friend and correspondent, the Indian-born British author Lawrence Durrell embellishes the current Grove paperback edition with the words, "American literature today begins and ends with the meaning of



what Miller has done." With due apologies to Whitman, Thoreau, Melville, and Twain, and later to F. Scott Fitzgerald and Ernest Hemingway, I'll have to offer a personal concurrence. By the time I entered college, Twain had stoked my imagination, as Melville and Hemingway would later. WithThe Great Gatsby, Fitzgerald had declared to the high school me, this is a novel, and it is good but it was Miller andTropic of Cancer, with just its first two powerful pages who said, this is life, and it's what you can be

Thus Tropic of Cancer holds up as the tre literary beginning for me. The end comes in that I always seem to find my way back to it, for inspiration or, yes, comfort, and I always find plenty of both to accompany the inevitable new meanings I unearth. An expatriate myself now, though worlds awya from Miller's early-30's Paris geographically, temporally, financially, and, most telling, artistically, it is one more way for me to relate to the book, my differences all the more reason to derive continued inspiration. I have seen in print the work described as a confession, but I've always read it more as manifesto. Despite being in his forties when it first hit Paris bookshelves, Tropic of Cancer marks the beginning for Henry Miller, just as it does for me.

[図書館から]

Tropic of Cancer / Henry Miller
 (New York: Grove Press, c1961)
 本学図書館に所蔵しております。
 貸出中(先生と一緒に写っています)

なお翻訳の『北回帰線』は
 本学図書館には所蔵がありません。

分類番号	登録番号
933/M	12040016400

特集：こころの一冊

Drug Disposition in Humans

薬学部 生物薬学科助教授 田中哲郎

この本はペンシルバニア大学医学部の William A. Creasey 博士の著であり、1979 年に Oxford University Press から出版された。すでに四半世紀が過ぎようとしているが、今でもこの本との出会いの場面を思い出すことができる。当時、大学院への進学を考えており、未熟ながらも自らの専攻について思案に耽っていた。薬学の分野は意外と広く、化学、生物学、物理学を基本としつつ、多くの専門分野に分かれている。そのような薬学の中であって、医学、理学、農学、工学等の他の理系学部になさそうな分野と映ったのが、薬剤学であった。ある先生を尋ね、自分の漠とした将来への希望について相談をしたことがある。ご自身の体験に基づかれて曰く、「専門の洋書を読んで御覧なさい」である。このご薫陶があったゆえに、本書との出会いがあったのであろう。院試の語学対策のつもりも多分にあったが、それ以上に、Drug Disposition という表題に惹かれた。Disposition とは性質、傾向、配置、天命などを意味するが、なかなか訳しづらい用語である。

日本語訳は「ヒトにおける薬の動態」である。薬の動態とは適用後の薬物の生体内運命を意味する。すなわち、投与後の吸収、分布、代謝、排泄をいう。薬剤学の院生時代、些少なから代謝の研究に関与したが、この本は木を見て森を見ずとなりがちな状況を、回避してくれたように思えてならない。原書を手にしてから一年後、今度は和書の棚で訳本に出会った。クリージー著、高木敬次郎・一番ヶ瀬尚・丹羽弘司・粟津莊司・木皿憲佐共訳『ヒトにおける薬の動態』（廣川書店、1981）である。まさに、

虎の巻を得ることとなった。この訳本からは、未熟さゆえ原書からは読み取ることのできなかった「ヒトにおける」という部分の印象を強く受けた。碩学の訳者らによる本書は、薬学研究は薬に帰結されるという純情な考え方をしていた自分に、薬が適用される対象は主にヒトであるという認識と、臨床的な研究への興味を与えてくれた。

原書と訳本は今でも研究室の書棚にあり、研究者の卵以前であった当時を思い起こさせてくれる。現在、薬物動態学の分野では、血中濃度レベルでの議論に留まらず、臓器レベルや細胞レベルでの議論へと進展している。さらに、CYP、トランスポーター、レセプターなど、分子あるいは遺伝子レベルでの知見も、テーラーメイド医療の名の下、臨床に反映されつつある。もちろん、薬物相互作用の問題などでは、臨床から動態研究へのフィードバックもある。

これらの知見は広く患者さんに還元されてこそ社会的に有意義なものとなるわけであるが、中には研究者の間であって研究の礎となる知見もある。この「すぐに役に立つことだけが研究の対象ではない」という視点にたどり着き、さすがに基礎か臨床かのジレンマからは解放されたが、今なお、臨床との直接的な接点を見出せないもどかしさは心の片隅で燻っている。本書は当時の最新の知見を踏まえたものではあるが、昨今の知見を含んでおらず、それゆえ今となっては内容が浅く感じられる箇所もある。

しかしながら、本書に記された医学者の視点から捉えられた薬物動態の一体系には、薬学を学ぶ者にとっても参



考となる点が多い。

ちなみに、「薬剤学は薬学の独壇場」という幼稚な認識は、本書によって打ち砕かれた。現在もなお、薬物動態の新知見や新しい剤形のコンセプトは、薬学のみならず医学、農学、工学においても研究の対象となっている。書籍から得たこと、感じたこと等、様々であるが、これには読み手の能力と感受性が影響する。専門書と呼ばれる書籍の中には、その時点におけるその分野の先端が織り込まれているものがある。この先端を感じ取る時、あるいは行間に潜む無数の知見に思いを馳せる時、新たな研究の端緒に遭遇することがある。そんな示唆に富む書籍との出会いはまた格別である。当然のことながら、学会の動向を知り最新の原著論文にあたることも必須となるが、ここでも謙虚な自己研鑽と批判的な読み方が重要となる。いずれにしても、知識にしる、知見にしる、何にしる、求めなければ

得られることはまずありえない。この求めてやまぬ情熱も大切であろう。コンサイスを片手に悪戦苦闘したあの日々を思い出しつつ、原点を見つめ直すことしきりである。

CYP(チトクロム [cytochrome]-P450)

薬物代謝酵素。肝臓での脂質代謝や薬物代謝に大きな役割を果たす酵素として、最近特に注目を集めている。

[図書館から]

Drug disposition in humans /

W. A. Creasey.

(New York : Oxford University Press, 1979)

については本学図書館の所蔵はありません。

ヒトにおける薬の動態 / クリージー著

(東京 : 廣川書店, 1981)については薬学部分館に2冊所蔵しております。

分類番号	登録番号
499.2/C	11870534500
499.2/C	11813711100

特集：こころの一冊

『金瓶梅』に描写される女性たちの住まい

工学部 建築学科助手 藤原美樹

『金瓶梅』は、明の万暦(1573-1620)中期に書かれた全100回の長編小説であり、『三国志演義』、『水滸伝』、『西遊記』とともに「四大奇書」と総称される。『金瓶梅』以外の三小説は登場人物のほとんどが英雄豪傑であるのに対し、『金瓶梅』の登場人物は、市井の人物であり、日常生活を中心に語られている。人生儀礼、年中行事、家庭生活の様子や料理、服装までが詳細に記述され、リアリズム小説として高く評価されている。この物語のタイトルは、3人の女性たちの名から一字ずつをとってつけられている。第五夫人(妾)として輿入れした潘金蓮、第六夫人(妾)として輿入れした李瓶兒。そして、潘金蓮に侍女として仕

えた春梅である。物語は、商人の西門慶を中心に、男性の遊び人の世界、商人の世界、官吏の世界などが描かれる。また家庭内の妻妾や侍女たちの生活も詳述され、女性たちの物語でもある。

西門慶には、正妻の呉月娘のほか、第二夫人の李嬌兒、第三夫人の孟玉樓、第四夫人の孫雪娥、第五夫人の潘金蓮、第六夫人の李瓶兒がいる。夫人たちは、登場と共に物語性に勢いを与えている。それぞれが異なった人物像をもち、それが見事に表現されている。この物語の女性の主人公といえは、潘金蓮である。この女性の名前の由来は、物語の中でこう書かれている。「潘金蓮は南門外の潘仕立屋の娘で、排行(兄弟の順番)は六番目です。幼い頃から器量よし、たいそう足が小さいことから、幼名を金蓮といいました。」金蓮とは、纏足の異名で小足の代名詞である。纏足した女性は、男性にとって最高の玩具であり、美の象徴とされていた。女性の纏足は、男性を惹きつける魅力のひとつであると同時に、家庭内

の女性の歩行を困難にする。それは部屋からの外出をしづらくさせ、住まいにおける幽閉化につながっている。これが当時の恵まれた女性たちの生活であった。

研究対象は、明代富裕層の住まいの「内」に隔離された、夫人たちの住まいである。『金瓶梅』を史料として、その叙述の中から、その住まいの世界を探求してみたいと思う。

『金瓶梅』には、住まいの内部の様子、陳設された家具や住まいに隣接する庭園の四季折々の様子などが登場人物とともに細かく描写されている。また、結婚、出産から死に至るまでの人生儀礼や年中行事についても多く語られている。

女性たちは、主人の定める秩序により、各自の私的領域を正房、東廂房、西廂房、後罩房、玩花樓というように住み分けている。住まいは、建具で間仕切りされ、屏風や簾などで隔てられ、帳や幕などでさらに囲われた、「内」なる場所である。

物語より、女性の住まいは、日常生活を営む場所であると同時に、移動可能な家具や帳、幕などの特別な設えにより、特別な儀礼の場所となることがわかる。すなわち、結婚の際には、婚礼の儀礼の場所(洞房と称する)となり、出産の際には産室(暗房と称する)となり、最期は、臨終を迎える場所となる。この「内」の場所である女性の住まいに出入りできる男性は、主人の西門慶に限られ、非常に神秘的な場所である。

女性の室(寢室)の様子(図1-3)をはじめ、さまざまな場所、情景などを視覚的に知ることのできるもうひとつの史料と

して、挿図(清宮珍宝?美図、明代崇禎本挿図)がある。挿図からは、家具の形状、種類、配置や屏風に描かれる絵、盆景などのインテリアや庭園の様子などを知ることができる。

これまでに、妻妾と侍女たちで構成された家族の「内」なる場所の生活および妓女たちの役割についての考察を行い、住まいの「内」と「外」における男性の生活、正妻ほか女性たちの「内」における生活および儀礼の過程、妓院の室内構成と非日常的な擬似的仙界としての場所について明らかにしてきた。今後の課題は、『金瓶梅』の住まいに関する記述を物語の構想や展開に関わるものとして捉え、先学の建築的史料からは知ることのできない、住生活の実態をこの物語から読み取ることである。その場所がどのように、女性たちの生活を支え、女性たちの意識や感覚と関わっていたかを解明したい。

参考文献

1. 作者不詳、白維国・ト鍵校註
『金瓶梅詞話校註』(兵叢書社、1995)
 2. 邱海濤著、納村公子訳
『中国五千年 性の文化』(集英社、2000)
- 図版出典(図1-3)
清宮宮廷秘蔵『清宮珍宝?美図』
(北海道大学名誉教授・中野美代子氏蔵本)



図1 正妻室
(正妻と下男の会話の場面)



図2 正妻室(産湯の場面)



図3 潘金蓮室
(第五夫人と2人の侍女)

[編集担当から]

藤原氏がこの書と出会ったのは二年前。「四大奇書」の「奇」に興味をそそられた氏は、また一方で現在とは異なる古代の女性たちの生活に関心を持たれていました。「現代では考えられないが、明代中国の富豪家族には、正妻のほかに複数の妾がいた。彼女達が広大な建物の中でどのように暮らしていたかに大変興味があった。これが出発点です」

『金瓶梅』は氏にとってあくまでも研究対象であり、氏曰く「残念ながら、こころの一冊には、まだ出会っていない」とのことでした。いずれその話が伺えるといいなと思っております。

[図書館から]

『金瓶梅』は本学図書館では平凡社の中国古典文学大系；第 33-35 巻(920.8/C/33-35)をはじめ約 35 件の関連書籍があります。

分類番号	登録番号
920.8/C/33	13780099800
920.8/C/34	13780099900
920.8/C/35	13780100000

特集：こころの一冊

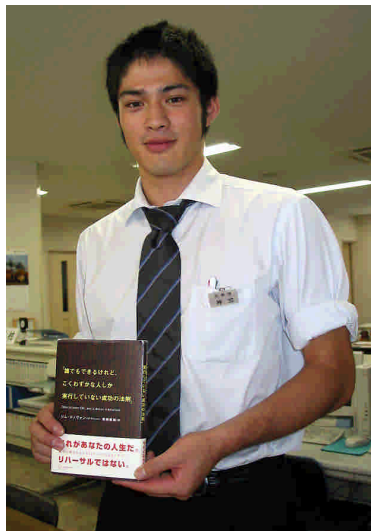
私の人生の教科書

学務部 就職課職員 神笠孝介

私には、この機会に紹介したい本が一冊ある。それは、ジム・ドノヴァンの『誰でもできるけれど、ごくわずかな人しか実行していない成功の法則』という本である。この本は、私に勇気と考え方の変化を与えてくれた。私の考えと一致し、または改めさせられ、後押ししてくれた。題のとおり私の人生の教科書と言える本である。

簡単に本の内容を説明すると、「今できることは先延ばしせず、今、行動する」「何十年後かの成功している自分(ゴール)をイメージし、そうなるための、一ヶ月、一年、三年、五年、十年といったそれぞれの

期間での目標(短い期間ごとのゴール)を立てる」「成功できる自分を信じる」「できないという思い込みを捨てる」「今日という日を最大限に生きる」といったような、誰にでも



できる成功の提案が 74 ほど書かれている。

これは著者が実際に実行し、成功したことに基づいて書かれている。だからいい。誰かにこうしなさいと言われても、何か目に見えるものがないと、なかなか受け入れることができないものだ。しかも著者は、この成功の法則を実行する前は、どん底の生活を送っていたらしい。アパートのお金も満足に払えず、ゴキブリと一緒に生活し、少しの収入はすべてお酒に消えていく。しかも酒癖が悪く友人も去っていった。こんな最悪の状況にあった著者が成功者になれるのだから、私にもなれないはずがないという気になってくる。だから素直に受け入れ、実行できる。

これまで私は多くのことを先延ばしにしてきた。たとえば、小学校の夏休みの宿題なんて最後の日にしかしていなかったし、もっと日常的に言えば、ご飯を食べた後の食器洗いなんかもそうだ。中学になるとバレーボールを始め、高校・大学と続けてきて、就職してからも社会人クラブで続けている。唯一私がこれまで生きてきた中で人に言えることは、真剣にバレーボール一筋に打ち込んできたことだ。しかし、その中でも先延ばしにしてきたことは山ほどある。たとえば日々の練習にしても先延ばしの連続だった。その一日のその瞬間はその時しかない。後戻りなんてできない。そんな考えは、当時の私にはまったくなかった。やる気の出ない日が続き、ただ大学

の体育館へ行き、練習をして帰る。やはりそんな時は結果もついてこない。大学を卒業して就職すると心から思う。「ああバレーがしたい」「大学時代に戻りたい」「今戻れたら」「あの時こんな考え方ができていたら」と。やはり後悔があるからそんなことを思うのだ。一日一日を最高の一日にしていればそんなことは思わないだろう。これに似たような思いは、あなたにも必ずあると思う。

私は、この本に出会ったことにより、考え方が少しずつ変わり、過去を振り返るのではなく、未来へ目を向けるようになっていった。そうすると、ものすごく気持ちが楽になり、やる気が溢れてきた。もっともっと良い人生が送れるはずだ。今まで自分自身の意見や考えを貫いたことが、人生の道を決める上で一回も無かった。人生は一度きりだ。運動会のように予行演習なんて無い。もっと極端に言えば、明日死ぬかもしれない。明後日かもしれない。自分がいつまで生きるかなんてわからない。だったら自分が思い描いている最高の人生を送りたい。

誰でもみんな「自分がこうだったらいいな」という思いがあるはずだ。でも「自分がなれるわけがない」とか、「自分はしようとしたが、周りから言われて断念した」とか、第一歩を踏み出す前にあきらめてい

る人がほとんどだと思う。私はあなたに本気で考えてみてもらいたい。何十年後かの自分はどのようになっていたいのか。それを本気で想像し、そこにたどり着くまでの短期間での目標を立て、とにかく第一歩を踏み出してほしい。「自分には無理」とか「周りの人にどう言われた」とかは関係なく、とにかく自分の心に正直に進んでみてほしい。何でもやってみないとわからない。やらないと失敗も無いが、成功なんてありえない。

私は今、ひとつの大きなゴールに向かって第一歩を踏み出している。そして、そうなるための短期間ごとのゴールに取り掛かっている。私に第一歩を踏み出す勇気くれたのは、この本である。また、そうなれると信じて疑わない強い心を身につけてくれたのも、この本である。

これから第一歩を踏み出そうか悩んでいる人に、ぜひ読んでいただきたい。そうすれば、あなたも自分自身で思い描く最高の人生のゴールに向かって、第一歩を踏み出せるだろう。人生に予行演習はないのだから。

[図書館から]

誰でもできるけれど、ごくわずかな人しか実行していない成功の法則 /

ジム・ドノヴァン著 ; 桜田直美訳

(東京:ディスカヴァー・トゥエンティワン, 2000)[ISBN: 4887591268]

本学図書館では所蔵しておりません。

特集：こころの一冊

小林よしのり著『戦争論』からみる日本人

人間文化学部 人間文化学科 1年 大戸 研

『戦争論』を手にしたのは、高校を中退した後に漫画の専門学校へ入ってからのことだ。当時は漫画の手法の一環としてしか見ておらず、なぜこんなにも感情的に描

けるのかと思うくらいであった。しかし読み返すうちに、危機へと迫りゆく日本の現実に目が向いてくるようになっていき、卒業後は一年勉強し、福山大学へ入学。いま、学校にいるのもこの本の影響が少なからずある。

愛称よしりんこと小林よしのりが世に出すゴーマニズム宣言は、漫画を駆使し、社会への批判を論じながら様々な疑問を

投げかけてくれ、考えさせてくれる。さらに、それぞれの章の結びに「ごーまんかましてよかですか？」と来て、筆者が堂々と読者に向かって訴えたいことを言い放つ独特なスタイルはおもしろく、心を打たれるばかりか、楽しい。それに、漫画(挿絵)という手段は文字にくらべて誤解がなく、表現が自在だ。

その中でも戦争論シリーズは封印された戦時中の歴史を明らかにし、捏造された歴史を暴く。この著者の試みは、社会の空気に惑わされることなく、左翼やサヨク、(親米ポチ)保守派といった反戦主義者達からの圧力に屈服せず妥協することもなく、戦時中の人々の名誉を回復すると同時に、自らの個を貫き通しているところに心を揺さぶられた。衝撃を受けた。そんな思いで本を出しているよしりんのやさしさを、くだらない、怖い、傲慢だという言葉で片付ける人たちは理解できない。

まず、この本には人としての生き方を説いているのだと思わずにはいられない。戦時中の物語を読めば、人は死に甲斐があってこそ生きて行けるのだ、命に代えても守るものがあるのだと思い知らされた。今の日本は、命あればそれでよしの生命執着願望があるためか、戦う覚悟がない。良心はあるが、ただ安全な殻に閉じこもるため、アメリカに逆らうのが気が引けるのか、イラク戦争を注意しない。反戦平和を掲げる人も多いが、そんな念仏を唱えたからといってなにができるのか。解決策を考えず、

ただ単に平穏と安全を願うばかりで命を張ることができもしない。「公と個の倫理」に於いても、国があるからこそ自分がいるんだと気づかせてくれた。

私は日本史が嫌いだった。特に近代史がそうだ。太平洋戦争で敗れたからだ。だが、戦争論を紐解けば、太平洋もとい大東亜戦争のとき、日本軍は植民地にされていたアジアを解放しようといつてもない目的があったことを知る。またナチスドイツから逃げてきたユダヤ人らを守った。八紘一宇という民族平等の思想を貫いて。

別著『台湾論』にも日本人の功業をみせられる。日清戦争の勝利で、日本は台湾を割譲させる。後に、交通網を整備し、教育に力を入れ、治安をよくし、八田與一が設計のダムにより米の増産を計るなどをした。イギリスやスペインなどの植民地政策と違って、衛生医療や教育の投資が大きく、双方ともに時代を歩んだことも。敗れたにせよ、その戦争がインドネシアやフィリピンなどのアジア諸国を独立へと促したのだからおどろきだ。

さらに、見落とせないのが、特攻隊の青年たちと戦犯にされた人々の遺言の叙情詩だ。彼らの最後の言葉には、愛が込められている。それは遺される家族や友人であり、愛しい母国、見ず知らずの子供たちへの思いなのだ。でも、死に直面するというのに、その詩は清清しく感じるものだ。青年たちは国と人々を守るために、自己犠牲となって死ぬ。あっさりとしたその潔さが「あさりの美学」と云われ、台湾にはその精神が残っている。そんなことも知らずに、学校では、単に受験要員として歴史を扱ってしまった。日本人という歴史を知らずに生きてきたことを、今では悔やんでも悔やみきれない。

私は将来、教師になりたいと望んでいる。教壇に立つそのときは、受験がらみなんてご法度だ。ただ教えるのではなく日本人として教えたい。国を想う生徒にしてあげ



たいのだ。

八田 與一 (1886-1942)

台湾総督府の土木技師。台湾南部の嘉南平野に世界的規模の灌漑ダム・烏山頭水庫を完成させた。

[図書館から]

新ゴーマニズム宣言 SPECIAL 戦争論

[1], 2, 3 / 小林よしのり

(幻冬舎、1998)

新ゴーマニズム宣言 SPECIAL 台湾論 /

小林よしのり (小学館、2000)

本学図書館には何れも所蔵しておりません

特集：こころの一冊

図書館利用者アンケート

アンケート実施期間のほとんどが夏期休業中だったにもかかわらず、多数の有効回答をいただきました。ご協力、本当にありがとうございました。

複数の回答を得て、トップだったのは、片山恭一『世界の中心で、愛をさけぶ』でした。「今の自分の考え方や物事の感じ方が少し変わった」「感動した」とのこと。

当図書館にある図書では他に、A.ロビラ『グッドラック』(一般；幸せになるためには、自分で努力しなければならないということが、子供にも理解できるように、やさしく表現されているから)、東山紘久『プ

ロカウンセラーの聞く技術』(心理；自分の目指している人物像の一部が書かれていたから)、J.D.サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』(最後のシーンにしか感動はないが、一生忘れない本だと思う)、そしてJ.K.ローリング『ハリー・ポッター・シリーズ』や、J.R.R.トールキン『指輪物語』の名もありました。

当然ながら、当図書館に無いタイトルを挙げてくださる方も、数多くいらっしゃいました。例えば齊藤孝『読書力』(薬；本を読む面白さがわかったから)、そしてT.オ布莱エンの『本当の戦争の話をしよう』(生物；今まで、映画やドキュメンタリーなどでしか見たことがなかったベトナム戦争が、いかに悲惨かをとてもよく表現している本だから)などでした。

図書館からのお知らせ

人間文化学部の「心理学科」および人間文化学科の「メディア・コミュニケーションコース」の図書の一部を、図書館本館内学習図書室に別置しております。新しい本ばかりですので、どうぞご利用ください。

人間文化学部の「心理学科」および工学部・機械システム工学科の「自動車システムコース」の雑誌が新しく用意されています。11月現在、図書館で閲覧できる主な雑誌は次のタイトルです。こちらもどうぞご利用ください。

-a: 心理学科

- 『現代のエスプリ』(至文堂)
- 『こころの科学』(日本評論社)
- 『心理学研究』(日本心理学会)
- 『心理臨床学研究』(日本心理臨床学会)
- 『精神分析研究』(日本精神分析学会)
- 『発達』(ミネルヴァ書房)
- 『発達心理学研究』(日本発達心理学会)
- 『臨床心理学』(金剛出版)
- 『臨床脳波』(永井書店)

-b: 自動車システムコース

- 『エンジンテクノロジー』(山海堂)
- 『オートメカニク』(内外出版社)
- 『カードック』(日刊自動車新聞社)
- 『自動車工学』(鉄道日本社)



【石山寺本堂（国宝）】

滋賀県大津市にある石山寺は、平安時代の小説『源氏物語』の作者、紫式部ゆかりの寺である。

名作『源氏物語』の作者でありながら、紫式部の生没年は不詳であり、本名も未詳である。

写真は、本堂への石段であるが、正面が「源氏の間」であり、紫式部と『源氏物語』との関係が説かれている。

また、本堂は巨大な珪灰石^{けいかいせき}の上に建てられている。

写真右端は、珪灰石の一端であり、珪灰石は国の天然記念物に指定されている。(K)

編集後記

福山大学図書館報第2号は楽しんでいただけましたでしょうか。利用者の方々に（学生の方はアンケートで、教員の方は原稿で）協力して頂いたおかげで、この冊子が出来ました。図書館自体も、「利用者あつての図書館」でありたいと、あらためて思った次第です。ありがとうございました。

(阪田・阿南)

編集・発行 福山大学附属図書館

〒729-0292 広島県福山市学園町1番地三蔵

<http://libexp.fulib.fukuyama-u.ac.jp/>

印 刷 三原プリント